

# 小学校での実践の紹介

活水女子大学 田渕久美子

# 共同研究の目的

- 日本の学校にサークルの実践を取り入れることが、学級づくりにどのような意義を持つのか。
- とくに、学級づくりの一環としての対話による共同体の形成に着目し、子どもの市民的資質を高めることに貢献するのではないかと考えている。
- 小学校における実践について、教師や子どもがどのように考え、また感じるのかを明らかにする。

# 研究の方法

- A小学校の学級活動の時間で、サークルの実践をしてもらう。
- A小学校は、市立の小学校である。郊外に位置し、市内では伝統的に教育困難な学校として知られてきた小学校である。
- 新型コロナウイルス感染症のため、参与観察はできなかったので、教師の振り返り（インタビュー）、子どもたちの感想などから考察を進めた。
- どの学年も、年に3回程度の実践時間しか取っていただくことができなかったが、年に3回は可能だった。
- とにかく時間がないと言われており、教師がサークルに魅力を感じても、年に3回以上、日々の活動に位置づけるには学級活動の時間でのサークル実践と異なる工夫が必要である。

# 教室での実践にあたって、 こちらから子どもたちに示した対話のルール

- ①司会者が「始めます」といったら、司会者とトーキング・ピースを持っている人だけが話すことができます。
- ②順番に、自分の話したいことを話します。
- ③話を聴いている人が、言われて悲しくなったり嫌な気持ちになることをわざと話してはいけません。
- ④サークルで話したことについて、サークルが終わったあとで嫌なことを言いません。

\*約束をすることで、より安心して話ができる場を作るという配慮から、③④を加えた。

# 先生方に示した話題の例示

## ①導入（アイスブレイク）的な内容

例) あなたの好きな動物は何ですか。

## ②自己認識が表れる少し深い内容

例) 変身できるなら, どんな動物になりたいですか。

## ③学校生活に係る内容

例) ○学期に楽しかったことは何でしたか。

## ④人間関係に係る内容

例) 友達と仲良くするってどういうことだろう。

# 子どもたちの語りについて

- 子どもたちには、サークルでの対話のあと、作文を書いてももらった。その内容は次のようなものである。

- ① みんなに向かって話したこと・みんなの話をきいたことで、気がついたことはなんですか（認知的側面の変化）。
- ② お話の会が終わったあとの今は、どんな気持ちですか（情緒的側面の変化）。

# B先生の実践

- B先生は、50代、生活綴方の実践をしてきた先生で、2019年から継続的にサークルの実践を行って来ている研究協力者である。「おはなしをきく会」として学級活動に取り入れられた。
- 1学期は、「どうぶつになるとしたら、どんなどうぶつになりたいですか」、2学期は、「楽しい1年2組にしていくためには、どんなことをしたらいいですか」、子どもたちは、サークルを楽しんでいる時間であると感じていた。
- 3学期は、突然教室の机の上に「しね」「きえろ」という落書きがされるようになったことに対して、保護者にも伝える一方、子どもたちへの早急な指導が必要となり、その際に、「らくがきのことについて、おもっていること、かんがえていることを、はなしてみましよう」というテーマでサークル対話をした。

# 子どもたちの語り（2学期）

「楽しい1年2組にしていくためには、どんなことをしたらいいですか？」

- みんなと楽しく勉強をする。
- 明るくてやる気のある教室にしていきたい。
- けんかをしないで仲良くくらす。
- いつも平和にする。
- 先生に怒られないように、みんなで仲良くしてから楽しくする。
- お友達にいじわるをせず、先生の話をちゃんと聞いてせいかつする。

# 教師へのインタビュー

- 自分自身と向き合わないことには話すことができないテーマであったためか、きちんと話を聞くように促す場面が何度もあった。それでも、1年生としては、十分、他者の話を聞こうとすることが伝わってきた。自分の思いにつながる話を聞くことができたときには自然と拍手が起こることもあり、子ども同士で共感し合う学びの姿を見ることができた。

# 子どものサークルでの語り（3学期）

「らくがきのことについて、思っていること、考えていることを話してみましよう。」

- 落書きが書かれて嫌だと思います。知らない人が落書きをして嫌だ。
- 自分が書かれたら嫌なのに書いたらだめだと思います。
- 自分が書かれたら嫌だから、他の人にもしない。
- 本物の楽しさのある教室をみんなで作っていかうとしてるのに、「消えろ」とか「死ね」とか書いたら、本物の楽しさのある教室になれない。
- 書かれた人が、心が傷つくからだめだと思います。

# 事後の感想文から（3学期）

「みんなに向かって話したこと・みんなの話をきいたことで、気がついたことはなんですか」

- やっぱりじぶんがされていやなことは、人にもいったらだめだとおもいます。ほんとうにしんだら、おうちの人がかなしむから、かいたらだめだとおもいます。
- こんなこととかがきけてよかったけど、ちょっといやでした。
- ほんもののたのしさのあるきょうしつをみんなでつくっていったのに、しね・きえろなどのことばをつかっちゃいけないと気がつきました。
- かいた人は、わざと、きずつきたくないのかいたらいけない。「ほんもののたのしさのあるきょうしつ」をその人によって、こわされたくない。

「お話の会が終わったあとの今は、どんな気持ちですか」

- かいた人がちゃんと先生にいつてくれればいいのになという気持ち、ぜったいに人にしねとか、きえろとかかいたらだめだとおもいます。これからは、ぜったいにかいたらだめだとおもいます。かかれたひとがきずつくから、もうかいたらだめだとおもいます。
- いやなきもちだけど、みんなにいえよかったです。
- らくがきをかかれた人がいて、いやな気持ちです。
- いやなきもちと、かなしいきもち、だから、これからは、しねや きえろをかかないようにする。

# 教師の語り

- サークルの実践について、あまり多くの時間は取れないが、学級づくりに意味があると考えている。
- サークルの場では、相手に対する意見を述べたり、感想を話したり、批判的に議論したりということは一切ない。それだけに、話し手も、聞き手も集中することが要求されていた。
- サークルの実践をしてみても、学校では子どもたちに話させるということだけに集中してきていたような気がする。**実際に大事なものは、子どもたちが友だちの話を「聴くこと」が先にあることなのではないか。**

- 1年生の3学期の実践では、「らくがき」についてを取り上げた。子どもたちの語りから、1年生にとって非常に重いテーマであったが、子どもたちは真剣にこの問題に向き合ったことが伝わってきた。
- サークルの後でまとめた感想では、これからの学級のあり方を前向きに考える意見が多数であり、真剣に学級について考えていこうとしていることが感じられた。その一方で、話されている内容は、どれも重く、決して明るい内容ではないこともあるため、「嫌な気持ち」になった子どもたちが少なからずいた。小学校1年生では、受け止め方に個人差が大きいことが考えられる。それでも、子どもたちが思いを語り尽くしたことは、学級づくりを進めていく上で非常に大きな力となったととらえている。

# C先生の実践

- C先生は、40代、2020年からサークルの実践に協力してくれている。
- 2年目の2021年では、「TTTime」として実践をしてくれた。全員を前にしての発表をしない場面緘黙の児童に配慮して「パスあり」で進められている。
- 実施された3回のTTTimeの際に書いてもらった子どもたちの文章では、1回目が初めての体験ということもあり、気づきや思いが具体的に書いてあった。2回目は、一人ひとりの個性への気づきなど、他者への視点が見られ、楽しかったことが分かる内容であった。3回目は、終業式の前日ということもあってか、学年のまとめとなるという意識もあったようだ。また、学級の前では発言しなかった場面緘黙の児童もこのときには発言できていた。
- サークルの話題は、1回につき3つでテンポよく進められていた。内容は、自己紹介や自分の好きなものを話す内容がほとんどであった。最後に「4-1はどんなクラス？」という問いがあった。

# 事後の感想文から（3学期）

「みんなに向かって話したこと，みんなの話をきいたことで，気がついたことはなんですか」

- みんなに向かって話した時，はずかしかったけど，みんながうなずいてくれたり，はくしゅをしてくれたりしたから，ちょっとゆう気が出て，はっぴょうを楽しくできました。
- 4－1はこんなに良いクラスだし，みんなの話を聞いていて，みんなまったくちがった話だから，人には人のいろいろな個性があることがよくわかりました。
- 「4－1はどんなクラス？」という，しつもんでみんないろいろな思いがあってうれしかったです。

「お話の会が終わったあとの今は、どんな気持ちですか。」

- あまりじこしょうかいをする機会がないので、少しきんちょうしたけど、発表できてうれしかったです。（場面緘黙の児童）
- 4-1のクラスになって、ほんとうによかったし、TTタイムは、前よりも楽しかったです。
- とても楽しくて、ちょっとさみしかったです。
- このメンバーさいごのTTタイムだから、めちゃくちゃさみしかったけど、思い出にして忘れないようにします。
- みんなの気持ちがつたわった。
- とてもすがすがしいという気持ちです。

# 教師の語り

- 子どもたちはサークルの活動が大好きで、お楽しみ会を学期に1回ずつクリスマス会とかハロウィーンパーティーとか機会を作りながらやっていたんですけど、じゃあ何やるって話になったときに、お話の会したいとか、TTTimeやるっていう子が結構多くて、子どもたちなりに自分のことを話すっていうのは好きだったのかなと思います。その時の雰囲気も、いい結構あたたかいような雰囲気が流れているので、そういう活動に関しては良かったかなと思っています。
- (場面緘黙の児童について) 1学期はこの子も止まって1分ぐらいしゃべらなくて、まわりからもパスしたら、ということでしたんですけど、3学期はそれも一切なくて、できたんで、この子なりに周りが安心して過ごせるような学級だったのかなと思います。多分、まわりが受け入れる体制ができたのではないかと思うんですよね。雰囲気もそうですし、何を言っても否定しないというルールがこの活動の中だけじゃなくて、クラスのいろんな活動の中で、何をやってもいいんだよという雰囲気があったんじゃないかと思います。

# 教師自身の変化について

- 叱る回数がすごく減りました。 どの回数, 叱る回数が。子どもたちが今年結構自主的に動いてくれたっていうのもあるし, 持ってる力もあったんだと思うんですけど, すごく, 自分たちでクラスをつくらうという意識が今年は見られたので, 僕がなにか手を出すということはほとんどなくて過ごせたので, そうなのも学級の雰囲気につながっているんじゃないかと思います。
- 自分のことを友だちに伝えるというのは, 他の子に知ってもらうことなので, 安心できる教室に近づくんじゃないかなというふうに思っています。

## まとめ

- 子どもたちの共同体の一員としての語り「4-1はこんなうに良いクラスだし…」「ほんもののたのしさのあるきょうしつをみんなで作っていているのに…」は、私的な語りに閉じるのではなく、みんなと同じ思いを持つ前提で学級を考えている。語り手だけでなく、聞き手があり、そこに共同行為があるからこそ、自分と他者（聞き手）を一体化したものとして語るることができる。
- こうした対話を通じた「語りの共同行為（やまだようこ）」によってストーリーが生成されることに、サークルの存在価値がある。
- そこに学級の一員として参画する者としての、**シチズンシップの芽生え**があるのではないか。